

緩話

急題



社会部次長 若江 雅子

「スゴイから」とIT企業の友人に勧められ、ある動画を見た。「オンライン七夕祭り」。被災地・仙台で開かれた七夕祭りの映像や、世界各地からのメッセージをインターネット動画サイトで流している。アクセス数は延べ1万件以上で、なかなかの盛り上がりだ。ただ、内容もさることながら、企画した人たちが「スゴイ」。運営に汗を流していたのは70歳代が中心で、最高齢は80歳。各地のシニア向けコミュニティサイト(SNS)の管理者たちだという。

SNSといえは若者のものだとばかり思っていたが、今やシニア

コンピューターおばあちゃん

向けSNSはかなりな成長分野らしい。「50歳未満お断り」をうたう「シニアコム」は会員数30万人、「趣味人倶楽部」や「Slow net」も入れた大手3社で利用者は延べ65万人にも上る。

一方で、企業に頼らず、自分たちで管理運営する「老人による老人のための」SNSも健闘している。

その一つが今回の七夕イベントに参加した「メロウ倶楽部」だ。メロウは英語で「熟した」の意味。その名の通り、会員4500人の9割は65歳以上で、健康情報や俳句、旅や歴史など円熟世代向けの話題が満載である。

幹事の一人、若宮正子さん(76)にお会いした。短く刈り込んだ白髪が上品な、小柄なおばあちゃん。



画・大野隆司

ネットが創る共助社会

iPad(アイパッド)を鑑賞と操る姿から、さぞや若い頃からITに精通して……と思ったら、パソコンに初めて触ったのは還暦を迎えてからという。

独身で、定年まで勤め上げた会社を退職し、さあ人生これから、と思ったら母親が認知症に。慣れない介護生活。家に籠もりがちな

日々が続いた。そんなある日、偶然目に入った本の宣伝文句が「ネットで世界とつながる」。衝動的にパソコンを買ったという。

ネットで同じ境遇の人と情報交換するうちに介護にも余裕が生まれ、孤独感も消えていった。今ではメロウの活動のほか、高齢者向けのパソコン教本を2冊出版し、

携帯小説まで書いている。「年をとると毎日が喪失体験の連続。仕事がなくなり、視力が落ち、髪が抜けていく。でもネットがあれば友だちができ、新しくできることが広がっていくの」メロウは結束の固さも売れた。先日は、北関東の老人ホームに入所しているハンドルネーム桐子さん(71)のパソコンが不調になっ

た。電話でアドバイスしようにも、桐子さんは耳が遠くて通じない。すると69歳の会員が、80才離れた自宅から車で駆けつけ直してくれた。

体が弱って外出できない会員も少なくない。「年寄りにとつて、ネットは世界と自分をつなぐ心の窓。それが分かっているからみんな懸命に助けあおう」と若宮さんは言う。

超高齢化と未婚化が進む中、2030年には65歳以上の5人に1人が独り暮らしになると予想されている。家族のいない日本人が一人で老いと向き合わなければならない時代だ。答えは容易には出ないが、電子共同体の中の新しい共助の仕組みにかすかな光が見えないか。喪失と孤独という高齢化社会の最大の敵を、メロウの仲間たちは軽快に乗り越えているように感じられるのだ。